

## もちよび地蔵<sup>じそう</sup>

むかし、<sup>とみた</sup>富田に<sup>いちろう べ え</sup>一郎兵衛というもち屋がいた。一郎兵衛は岩舟の地蔵さまを深く信じていたので、毎年正月には大きなもちをお供え<sup>そな</sup>して「<sup>かないあんぜん</sup>家内安全」「<sup>しょうばいはんじょう</sup>商売繁盛」を願っていた。

ところが、その子供の<sup>じろう べ え</sup>次郎兵衛になってからは、大きなもちはもったいないと、少し小さいもちをお供えした。そうするうちにだんだん、もうからなくなっていき、そのうち、小さなおもちをお供えできるかどうかの<sup>びんぼう</sup>貧乏になってしまった。孫の<sup>さぶろう べ え</sup>三郎兵衛になると、さらに<sup>ます</sup>貧しくなり、正月にお供えすることができなくなってしまった。

ある年の<sup>く</sup>暮れ、三郎兵衛がねていると、<sup>まいばん</sup>毎晩西の方から、

「三郎兵衛！もち持ってこーい！」

という声が聞こえてくるようになった。ある夜、三郎兵衛はその声をたどって西の方に歩いていくと、岩舟山の地蔵がある方向から聞こえていることに気付いた。

三郎兵衛は、明けた年の正月に、大きなもちをつくってお地蔵様にお供えをして「家内安全」「商売繁盛」をお願いした。それからと

いうもの、知らず知らずのうちにくらしも楽になっていき、毎年<sup>くろう</sup>苦勞  
せずに大きなもちを供えられるようになったということだ。今でも、  
その子孫<sup>しそん</sup>は毎年おもちを供えているとか…。